

SoulFire 天理教フェイスカンファレンス

天理教ニューヨークセンター所長
福井 陽一 Yoichi Fukui

ゆかたは着物 ニューヨークから世界宣言

「ゆかたは着物だ」「いや、浴衣は着物とは別物だ」という長年の論争に終止符を打つきっかけとなるような「ゆかたを仲間に、きものは世界遺産へ」と題した世界宣言が、7月17日ニューヨークから発信された。宣言したのは「NPO法人きものを世界遺産にするための全国会議」の代表理事、吉田重久さん。「外国人から見たら、ゆかたも着物も同じ。ゆかたをカジュアルなKimonoとして楽しんでいる。『ゆかた』はもうすでに『きもの』なのです」と吉田さんは語る。ただ、外国人目線だけではなく、このままでは着物が産業として消滅してしまいかねないという危機感がそこにあるようだ。日本は少子高齢化で、着物を着る人も作る人もどんどん減っている。

今回宣言の決定打になったのは、同NPOをサポートする着物愛好者「和装家」へのアンケートの結果、約8割が「ゆかたはきもの仲間」と回答し、予想以上に着物への考えが自由であることが分かったからだそう。同NPOは2014年に着物業界各社が力を合わせて設立し、現在139社の業界各社が加盟している。今回の宣言を「きもの人口をケタ違いに増やし、きもの世界を大きく変えるもの」として認識し、着物の世界遺産（無形文化遺産）登録に弾みをつけるものと考えている。着物はすでに世界遺産になっていると思っていたらそうではなかった。ニューヨークでの宣言を皮切りに今後、世界を回って宣言活動をしていくとのこと。着物産業が消滅してしまいかねない危機感を持ちながら、着物人口をケタ違いに増やそうとする意欲と行動力に感心した。

SoulFire 天理教フェイスカンファレンス

6月23日から25日まで、アメリカ伝道庁の主催により、SoulFire 天理教フェイスカンファレンスがカリフォルニア州バームスプリングス市にて開催され、アメリカ、カナダ、イギリスから205名が参加した。将来の天理教を担う若い世代を含む英語圏の教友が一堂に会して、英語で天理教の教えを学んだり、さまざまな社会問題を取り上げて話し合いの場を持った。

この会は、2006年におぢばで開催された「天理フォーラム」に続くものではあるが、大きな違いは、北米在住のスタッフのみによって企画・運営されたことだ。当初は2020年の開催予定で準備されていたが、コロナ禍の影響で開催が延びていた。昨年6月には同じ趣旨のもと、オンラインで開催された。今回、若いスタッフを中心となり長い時間をかけ、力を合わせて準備が進められ、ようやく開催に辿り着いた。

最初に、ハワイ州議会議員として4期目を務め、与党の院内総務に任命された中村ナディーンさん（ようぼく）が「IGNITING OUR JOYOUS FAITH」のタイトルの下、基調講演を行った。議員としてお道の精神に基づいて行動しハワイの地に貢献しているさまざまなプロジェクトを紹介。他の議員からの協力を得て与党のリーダーとして務められるのは、お道の教えとその教えを信仰してきた親々のお陰であると感謝し、また教えに対する自信と誇りを参加者と共有した。また、家族の身上を通して節



写真：SoulFireでの歓談の様子

から芽を出す力強く陽気な考え方に参加者一同は深い感銘を受けた。

翌日の一般セッションでは、岡崎マーロン・サウスパシフィック教会長が英語で歌いながら踊れる「みかぐらうた」Singable Danceable Mikagura-uta(以下SDM)を紹介した。このプロジェクトは約30年前から始められ、時間をかけて検討されてきた。今回座りづとめとよろづよ八首のデモンストレーションが行われたが、公の場での最終バージョンの発表は初めてだったと言える。長い間このプロジェクトに関わってきた岡崎マーロン会長からは、発表の興奮を抑え切れないほどの喜びが伝わってきた。SDMはあくまでも英語圏の入信もない人々が「みかぐらうた」の意味を理解しながら踊れる事を目的としており、より多くの人々がおてふりに親しみ学びやすいように考えられたものである。

その他に、現代の社会問題や子弟育成、リーダーシップ、地域社会との繋がり、信仰信念、身上の障りや事情のもつれへの対応、新しい布教方法、SDM講座などをテーマにした12の分科会が設けられ発表やねりあいが活発に行われた。

参加者からの声としては、「次世代を担う若いパネリスト達の思慮深い意見に感銘を受け、将来のアメリカの道に大きな希望を感じた」「何年も会っていない友人と再会できて貴重な時間となった」「自分が一番不幸と思ってきたが、もっと苦労されている方々の話を聞いて、生きる元気が湧いてきた」「ハワイの方々とは全く繋がりがなかったが、今回たくさん知り合いができて有益だった」「積極的に地域の団体と繋がりを作っていこうと思う」「ニューヨークの文化協会の活動を参考に自教会でも取り入れていきたい」など、私が聞いただけの限られた感想だが、皆さん大いに勇みの種を得たように思う。

また保護者と参加した25名の少年会員のためには、「SPARKS」と題し、信仰に基づくお楽しみ行事、ミニ・オリンピック、おつとめ練習などが行われた。SoulFireに参加した親と共に、少年会のメンバーもたくさんの素敵な思い出をつくる事ができた。

今回のカンファレンスの企画・運営に携わった多くの若いスタッフにとっては、かけがえのない経験となり、大きな力を付けていただいたように思う。このイベントを通して若い世代の人々が勇み励まし合いながら、これからの北米や英語圏の教勢が伸展していく原動力になるように願っている。